

保育におけるマルトリートメントと関連する組織要因の探索¹⁾

An Exploratory Study of Organizational factors related to Maltreatment at Early Childhood Education and Care Facilities

植 村 善太郎

松 岡 恵 子

Zentaro UEMURA

Keiko MATSUOKA

福岡教育大学 学校教育ユニット

田川市役所

(令和元年9月30日受付, 令和元年12月12日受理)

Abstract

In recent years, there has been an increase in social interest in maltreatment for children, but there are not many studies on maltreatment in facilities such as kindergartens and nurseries. The purpose of this study was to explore organizational factors related to maltreatment in early childhood education and care facilities. We conducted an online survey of 200 kindergartens or nurseries workers (56 men, 144 women, average age 41.84 years) regarding “maltreatment”, “teamwork” that meant harmony in the organization, and “openness of the organization”. As a result of analysis of variance with “teamwork” and “openness” as independent variables, and “maltreatment” as a dependent variable, a significant main effect of “teamwork” was detected. It suggested that higher teamwork produced lower maltreatment. Based on the results, discussions were made on the mechanism by which maltreatment occurs in the facility and future research issues.

キーワード：マルトリートメント, 幼稚園, 保育所, チームワーク, 組織の開放性

Keywords: maltreatment, kindergarten, nursery, harmony in the organization, openness of the organization

問題

1. 近年の保育におけるマルトリートメント問題と報道

2019年になって、福岡市（蓬田，2019），東京都（毎日新聞，2019），北九州市（井上・宮城，2019），下関市（佐藤・近藤，2019），そして栃木県真岡市（池田，2019）における保育施設内での子どもに対する体罰，暴言などの虐待的対応，いわゆるマルトリートメント（maltreatment）²⁾の発生がたて続けに新聞紙上で報じられた。近年の家庭内での虐待事案に対する社会的注目が背景の一つとなつて，保育施設には子どもを保護する役割がますます期待されている。その保育施設において虐待的な対応，マルトリートメントが生じて

いた事実には，関係者の多くが衝撃を受けた。保育施設の保育のありかたに，現在，社会の注目が集まっている。

しかしながら，保育施設におけるマルトリートメントは，これまでも何度か新聞報道がなされ，社会的な注目を受けてきた事象である。例えば，1988年10月12日の朝日新聞における読者からの投書欄には，匿名希望の30歳の元保育者による「保育園の裏にある虐待」という記事が掲載された（朝日新聞，1988a）。同僚が子どもにビンタをしたり，子どもが吐いた食物をスプーンで子どもに押し込んだりといった虐待的な保育をしているのに，他の同僚も園長も何も言わず，自分だけが抗議をしていたが，8年間の勤務の後，疲

れて退職したとの内容がつづられていた。この記事には反響が大きかったようで、10月17日には託児所で保育をしている人から、人手不足の中保育をしていると、自分も子どもに厳しく対応してしまっているとの投書が掲載された（朝日新聞、1988b）。10月28日には、10月12日の記事への反響が多かったこと、投書内容に関する有識者からのコメント、そして保護者からの声などが紹介されたまとめ記事が掲載されている（朝日新聞、1988c）。

その約8年後、1996年1月10日には、保育者たちから虐待を受けた子どもを持つ母親が、現職及び元保育者、そして虐待を受けた子を持つ保護者などの虐待体験を集めてまとめた書籍「子どもたちの悲痛な叫び」の出版が新聞記事で紹介された（朝日新聞、1996a）。これをきっかけとして、1月15日には投書欄に保護者の立場からの声が掲載されたり（朝日新聞、1996b）、1月19日には、施設内での虐待やいじめに関しての全国保育協議

会の会長および副会長による談話が紹介されたりした（朝日新聞、1996c）。

これらの新聞報道からわかることは、保育所内での子どもに対するマルトリートメントは、近年の新たな問題というわけではなく、少なくとも1980年代後半以降、何度か新聞報道が行われている問題である。

なお、本研究では、以後、区別が必要な箇所以外では、幼稚園と保育所そして認定子ども園で働く教員、保育士を合わせて「保育者」と記した。

2. マルトリートメントの発生要因に関する研究

家庭内でのマルトリートメントの発生要因については、子ども側の要因として気質、養育者側の要因としての被虐待経験、性格、ストレスといった要因、そして環境要因として婚姻状況や就労状況そして近隣環境や社会情勢などの多様な要因が関わりと考えられている（Belsky, 1980）。同様に、厚生労働省の「子ども虐待対応の手引き（平成25年8月 改正版）」（厚生労働省雇用均等・児

Table 1 虐待に至るおそれのあるリスク要因（厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課による「子ども虐待対応の手引き（平成25年8月 改訂版）」より）

1. 保護者側のリスク要因

- ・妊娠そのものを受容することが困難（望まない妊娠）
- ・若年の妊娠
- ・子どもへの愛着形成が十分に行われていない。（妊娠中に早産等何らかの問題が発生したことで胎児への受容に影響がある。子どもの長期入院など。）
- ・マタニティーブルーや産後うつ病等精神的に不安定な状況
- ・性格が攻撃的・衝動的、あるいはパーソナリティの障害
- ・精神障害、知的障害、慢性疾患、アルコール依存、薬物依存等
- ・保護者の被虐待経験
- ・育児に対する不安（保護者が未熟等）、育児の知識や技術の不足
- ・体罰容認などの暴力への親和性
- ・特異な育児観、脅迫的な育児、子どもの発達を無視した過度な要求 等

2. 子ども側のリスク要因 ・乳児期の子ども ・未熟児

- ・障害児
- ・多胎児
- ・保護者にとって何らかの育てにくさを持っている子ども 等

3. 養育環境のリスク要因

- ・経済的に不安定な家庭
- ・親族や地域社会から孤立した家庭
- ・未婚を含むひとり親家庭
- ・内縁者や同居人がいる家庭
- ・子連れの再婚家庭
- ・転居を繰り返す家庭
- ・保護者の不安定な就労や転職の繰り返し ・夫婦間不和、配偶者からの暴力(DV)等不安定な状況にある家庭 等

4. その他虐待のリスクが高いと想定される場合

- ・妊娠の届出が遅い、母子健康手帳未交付、妊婦健康診査未受診、乳幼児健康診査未受診
- ・飛び込み出産、医師や助産師の立ち会いがない自宅等での分娩
- ・きょうだいへの虐待歴
- ・関係機関からの支援の拒否 等

童家庭局総務課, 2013) では、虐待のリスクファクターについて、保護者側のリスク要因、子ども側のリスク要因、養育環境のリスク要因、その他の要因が挙げられ、予防促進の手がかりにすることが求められている (Table 1)。

このように家庭内でのマルトリートメントの発生要因については、検討が行われ、信頼性の高い情報として公表されている。

一方、公的な保育施設でのマルトリートメントの発生については、前述のように新しい問題ではないものの、問題として顕在化したケースが多くなく、社会的な注目が継続しなかったせい、研究はあまり行われてきていない。前田・市川 (2013) は、ある児童養護施設で発生した4件の「不適切な関わり」に関して実践された再発防止策検討委員会の活動を報告している。4件の内容は、職員による児童に対する身体的虐待を疑われた事例、異性の児童に対する職員の不適切な接近事例、体罰など職員による不適切な児童への関わり事例、そして児童同士の不適切な性的行為の連鎖事例であった。著者たちが全職員に個別面談をしたところ、事故対策については、次のような要因が挙げられていた。第1に、「職員への課題・対策」というカテゴリーに該当する発言の頻度が高く、具体的には職員同士の話し合いやコミュニケーションの重要性を指摘していた。次に多かった発言カテゴリーは「施設運営管理上の対策」で、内容は職員研修の強化、建物の構造上の課題、第三者の目の導入などがあがっていた。その他には、職員配置基準の向上、子どもの定員数削減、一人勤務の解消、職員の相談体制の強化、スーパービジョンの必要性などが挙げられていた。まとめると、職員間のチームワーク、第三者の目の導入、個人に対する研修、人員配置や物理的環境の調整といったことが重要ということであろう。

家庭内でのマルトリートメントは、特定の養育者と子どもとの間で発生する事態なので、当事者間の相性、それぞれの持つ個性の問題が原因になりうる。一方、保育施設でのマルトリートメントは、特定の保育者だけが他の職員に見つからずに、不適切な行為を行なっている場合に加えて、不特定の子どもに対して、複数の職員が関わっている場合もある。施設でのマルトリートメントを検討する場合、組織的な観点は重要である。

3. 本研究の目的

前述のように保育施設におけるマルトリートメントの発生に関わる要因を検討した研究は多くな

い。また、前田・市川 (2013) で見いだされた結果も、その一般性は確かめられていない。適切なケアを受けることは、子どもの発達にとって大切なことであると同時に、子どもの権利でもある。保育施設におけるマルトリートメントの発生要因を検討することで、そうした事態を予防するための基礎資料を提供できるであろう。

本研究では、前田・市川 (2013) で指摘されている職員間のコミュニケーション、チームワーク、そして第三者の目に着目し、そうした要因と施設でのマルトリートメントとの関連性を探索することにした。

方法

1. 調査方法

楽天リサーチ株式会社 (現在、楽天インサイト株式会社) を利用して、2015年の11月から12月にかけて全国の現職の幼稚園教諭および保育士200名 (男性56名、女性144名、平均年齢41.84歳、標準偏差10.82、最小値22歳、最大値65歳) から調査データを得た。

2. 質問項目

フェイス項目 年齢、所属施設の種類 (幼稚園、保育所、認定こども園の別、そして、公立と私立のいずれか)、保育者としての経験年数を尋ねた。
保育におけるマルトリートメント 主として身体的な攻撃として、「子どもに対して、たたく、つねる、小突くなどの行為をすることがある」、「他の職員が、子どもに対して、たたく、つねる、小突くなどの行為をしている」の2項目を準備した。これらに対して、自分の考えや行動に「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの5段階で評定を依頼した。マルトリートメントは広い概念であり、多様な項目を設定しうるが、本研究では最も日常的に生じやすく、認識しやすいと考えられる「小さな体罰」を取り上げた。

職場のチームワーク 「朝礼や職員会議などで、職員同士の情報共有はできていると思う」、「園の保育方法や考え方は職員間で統一されていると思う」、「園長や主任などはリーダーシップを発揮していると思う」の3項目を設定し、自分の考えや行動に「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの5段階で評定を依頼した。チームワークは、多面的にとらえることが可能な概念であるが、前田・市川 (2013) においてコミュニケーションの重要性が挙げられていることから、情報や方針の共有を重視して、こうした構

成をとった。

外部への開放性 第三者の視点が多く入るということは、外部への開放性が高いととらえることができる。外部への開放性をとらえるために、次のような7項目を設定した。「園内外を合わせた職員対象の研修が開催される回数」、「行事などでPTAや地域住民が来園する回数」、「実習や学生ボランティアが来園する回数」、「保護者の保育参観が行われる回数」、「地域の行事（お祭りやイベントなど）に園児が参加する回数」、「他の園の教職員が公開保育などで研修や見学に来園する回数」、「地域の発達支援センターなど、教育・福祉・医療関連機関の行政担当者が、相談・指導のために来園する回数」であった。これらに対して、「全くない、あるいは数年に1回程度」、「年に1、2回程度」、「半年に2～4回程度」、「月に1回程度」、「月に2回以上」の5段階から、最も所属園の状況に近いもの1つを回答するように求めた。

3. 人権への配慮

本調査への参加は任意であり、提供されたデータが学術的に使用されることについては、あらかじめ参加者から同意が得られている。また、データは匿名化されていると同時に、厳密に管理され、参加者のプライバシーが侵害されることがないように設計されていた。

結果

1. 調査回答者に関する記述統計

性別構成、年齢構成は方法の頁で記した通りであった。所属施設の内訳は、私立保育所所属の人が40%を示しており、次に多かったのが公立保育所、そして私立幼稚園所属の人であった。認定こども園所属の人は、公立と私立を合わせて10%未満であった（Table 2）。

経験年数については、Table 3のような構成であった。10年以内の人で全体の53%を占めていた。その一方で、人数は多くないものの25年を超えている人も存在し、経験について、多様な人から構成されていることが分かった。

2. 尺度についての基本情報

尺度の値は、構成している項目得点を合計し、それを項目数で割ることで算出している。それぞれの尺度の平均値、標準偏差、最大値と最小値、そして α 係数をTable 4にまとめた。なお、外部への開放性は、特に必要がない個所では、「開放性」と記した。

尺度の信頼性については、次のようであった。マルトリートメント尺度は、2項目で構成されているため、 α 係数が.69と高くはないが、尺度としては使用できると判断した。2項目間の相関係数は.52（ $p<.001$ ）だった。チームワークは、項目数が3項目と少ないにもかかわらず、十分な内的整合性を有していた。開放性は様々な項目で構成されていたが、一定の内的整合性があり、外部への開放性という一次元の組織特性が存在することがうかがわれた。

尺度得点については、次のようであった。マルトリートメントは、行為頻度、他者の行為の認知頻度を尋ねており、全体としての平均値は非常に低い値で、行為頻度や認知頻度が低いことが分かった。しかし、得られたデータの最大値は4であり、標準偏差も極端に小さいわけではなかった。すなわち、本研究サンプルにおいては、一定の分散が存在しており、分析には支障はないと判

Table 3 調査参加者の保育者としての経験年数の内訳

	頻数	%
5年以内	60	30.00
10年以内	46	23.00
15年以内	41	20.50
20年以内	25	12.50
25年以内	10	5.00
30年以内	10	5.00
31年以上	8	4.00
合計	200	100

Table 2 所属施設別の調査参加者数

	公立保育所	私立保育所	公立幼稚園	私立幼稚園	公立認定子ども園	私立認定子ども園	合計
頻数	48	80	10	44	5	13	200
%	24.00	40.00	5.00	22.00	2.50	6.50	100

Table 4 各尺度の基本統計量

	平均値	<i>SD</i>	中央値	<i>min</i>	<i>max</i>	α 係数
マルトリートメント	1.75	0.84	1.50	1.00	4.00	0.69
チームワーク	3.25	0.94	3.33	1.00	5.00	0.83
開放性	2.51	0.59	2.43	1.00	4.86	0.77

Table 5 尺度間の相関関係（数値は積率相関係数）

	1	2	3
1. マルトリートメント	1	-0.19 [†]	-0.06
2. チームワーク		1	0.29**
3. 開放性			1

** $p < .01$, [†] $p < .10$

断した。チームワークについては、中点の3点を平均値が上回っており、ポジティブな認識が多いととらえられた。開放性については、Table 4にあるように、平均値が2.51であった。標準偏差が0.59と相対的に小さいことから、様々な外部からの訪問者や外部への参加の頻度は、平均すると、年に1～2回と半年に2～4回との間辺りである施設が多いということであろう。

3つの尺度間の関係を確認するために、相関係数を算出した（Table 5）。チームワークと開放性との相関係数が.29で高くはないものの有意となった。マルトリートメントとチームワークとの相関係数は-.19で10%水準での有意傾向を示した。開放性とマルトリートメントとの相関関係は有意ではなかった。

3. チームワークおよび開放性とマルトリートメントとの関連

チームワークおよび開放性が、マルトリートメントに及ぼす影響を検討する前に、フェイス項目がマルトリートメントと関連していないかを確認した。マルトリートメントを従属変数、性別、所属施設種別、経験年数（5年刻みで7水準）をそれぞれ独立変数とした一要因分散分析を行ったところ、いずれについても有意な効果は検出されなかった（それぞれ、 $F(1, 198) = 2.11$, ns ; $F(5, 194) = 1.81$, ns ; $F(6, 193) = 0.39$, ns ）。

チームワークそして開放性得点それぞれの中央値を境に、高群と低群を構成し、これらを独立変数、マルトリートメントを従属変数とした2要因分散分析を行った。なお、チームワークと開放性とは有意な相関関係を持っているものの（Table

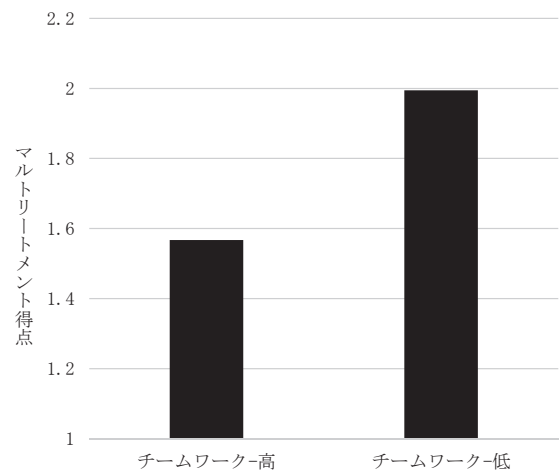


Figure 1 チームワークの高低とマルトリートメントとの関連

5), 相関係数は低いことから、分散分析を行うことには問題がないと判断した。分析の結果、チームワークの有意な主効果が検出された ($F(1, 196) = 12.87$, $p < .001$)。開放性の主効果そして2つの変数の交互作用は有意ではなかった ($F(1, 196) = 0.93$, ns ; $F(1, 196) = 0.51$, ns)。チームワークは、高い群が、低い群よりもマルトリートメント得点が低く、マルトリートメントに関わる程度が低いことが分かった（Figure 1）。

考察

1. マルトリートメントに及ぼす組織の要因

本研究のマルトリートメント尺度は自らが子どもをたたいたり、小突いたりする頻度と、同僚が

そうした行動をとっている程度とから構成されていた。この二つの項目間には、 $r=.52$ という中程度の相関が存在していた。これは、子どもに対するマルトリートメントが、周りの状況と相互影響しながら発生する行為で、個人的な特性のみで説明されるものではないことを示唆していると考えられる。

チームワークと開放性とがマルトリートメントに及ぼす影響については、チームワークが高い群は、低い群に比して、マルトリートメントの頻度が低下することが明らかになった (Figure 1)。前田・市川 (2013) では、「不適切な関わり」に対する防止策に、職員間での話し合い、コミュニケーションが多く挙げられていたが、そうしたチームワークの重要性が、本研究では確認されたといえよう。コミュニケーションが少なく、目標や規範が共有されていない組織の間では「同僚に見られている」という意識が薄れ、こうした不適切な行為が生じやすくなり、それを目にした人が同調し、さらに同調者を増やすといったプロセスが存在しているのかもしれない。

一方、組織の開放性は、マルトリートメントと有意な関係を示さなかった。前田・市川 (2013) において第三者の視点の重要性が挙げられているように、開放性が高い組織では、部外者の視点を意識する程度が高くなり、それがマルトリートメントを抑止すると考えたが、直接的な関係を持たなかった。マルトリートメントの発生程度が全体で見た場合に低いので、開放性が低い組織でもマルトリートメントが生じていないことが多いことが、こうした結果を生じさせた原因と推測される。また、「問題」において紹介した朝日新聞 (1988a) の記事においては、マルトリートメントが生じていた施設では、部外者が多く参観に来ていたとの記述があり、第三者の視点が多く入ることと、マルトリートメントが抑止されることとは、単純な関係ではないのかもしれない。本研究では、開放性とチームワークとは、 $r=.29$ と低いながらも有意な相関関係を有しており、開放性が高いとチームワークが良くなる、あるいはチームワークが良いような組織は開放性が高くなるという関係を持つことが明らかになっている。こうした結果から、開放性、すなわち第三者の視点は、間接的にマルトリートメントと関係を持っていることが示唆されているが、その効果については今後の確認が必要であろう。

2. 今後の課題

尺度構成の検討 本研究では、マルトリートメン

ト、チームワーク、開放性について、独自で尺度構成を行って検討作業を進めた。調査実施のための現実的な制約があり、項目数も限定的であり、多面的概念の一部しか捉えていないという課題がある。マルトリートメントは、本研究で取り上げた身体的なものだけでなく、性的、心理的なもの、そしてネグレクトがあるとされており (厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課, 2013)、こうした側面の項目も含めた調査が望まれるであろう。また、チームワークについても、本研究では、情報共有、園の保育方法の統一、リーダーシップといった運営機能の有効性を主に扱っていた。しかし、職員間での業務連絡ではない言葉のやりとり、雑談、現場から管理者への要請、相互への信頼感など、様々な側面がチームワークには存在し、それらがマルトリートメントに及ぼす影響も存在するように考えられる。開放性については、頻度を尋ねたが、滞在時間や人数などはとらえられていない。また、部外者が来ること、あるいは外部に出ていくことが、外部と関わっているという意識につながっているのかも把握できていない。今後の研究では、こうした概念を整理した上で、より適切な尺度を使用して研究を進めていくことが望まれるであろう。

勤務条件の影響の検討 本研究では扱えなかったが、保育者の勤務環境は一般的に厳しいといわれている。もちろん、施設ごとの違いが大きく一概にはいえないが、長時間労働を強いられ、給与が低いといった勤務状況の施設も存在する。そうした勤務条件では、高い保育の質を望むことは難しいであろうし、マルトリートメントが発生するリスクも高くなると推測される。こうした勤務条件も視野に入れた調査が必要であろう。

個人要因の検討 本研究では、組織要因に焦点を当てて、マルトリートメントの生起に影響する要因を検討した。前述のように、本研究では、自らが子どもをたたいたり、小突いたりする頻度と、同僚がそうした行動をとっている程度との間には、 $r=.52$ という中程度の相関が存在していた。これは、身体的なマルトリートメントは、他者の同様の行為と相関する組織的な性質を持っていることを意味すると同時に、他者とは独立して発生する部分も少なくないことを意味している。マルトリートメントを抑止していくためには、マルトリートメントに接近していく個人的な条件も、今後明らかにしていく必要があるであろう。そうした個人的な条件には、保育者の性格、愛着スタイル、保育観、倫理観、研修歴、経験年数など、た

くさんのものが考えられる。こうした様々な個人的な条件の中から、関連性が高そうなものを抽出し、調査デザインに組み込んだ上で、検討を行うことが望まれよう。

引用文献

- 朝日新聞 (1988a). 保育園の裏にある虐待 (ひととき) 朝日新聞 10 月 12 日朝刊
- 朝日新聞 (1988b). 保母は天使になれない (ひととき) 朝日新聞 10 月 17 日朝刊
- 朝日新聞 (1988c). 保育の裏で“しつけ”におびえる子ら (金曜ひろば) 朝日新聞 10 月 28 日朝刊
- 朝日新聞 (1996a). 保育所で傷つく幼児 「内部告発」含め本に 保母ら 28 人が証言 朝日新聞 1 月 10 日夕刊
- 朝日新聞 (1996b). 保母の労働の環境改善して (声) 朝日新聞 1 月 15 日朝刊
- 朝日新聞 (1996c). 「保育所で虐待」に反論 全国保育協議会の松川和照副会長 朝日新聞 1 月 19 日朝刊
- Belsky, J (1980). Child maltreatment: An ecological integration. *American Psychologist*, 35, 320-335.
- 花田裕子・永江誠治・山崎真紀子・大石和代 (2007). 児童虐待の歴史的背景と定義 保健学研究, 19, 1-6.
- 池田拓哉 (2019). 2 教諭の暴言, 行政指導 県・市, 虐待と判断 真岡のこども園 / 栃木県 朝日新聞 9 月 3 日栃木全県・1 地方 朝刊
- 井上卓也・宮城裕也 (2019). 外国人講師が保育園児の尻たたき 施設, 投稿動画で一転認める 北九州 毎日新聞 最終更新 5 月 15 日 21 時 44 分
 〈<https://mainichi.jp/articles/20190515/k00/00m/040/073000c>〉 (2019 年 9 月 28 日)
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 (2013). 子ども虐待対応の手引き (平成 25 年 8 月 改正版) 2013 年 8 月
 〈https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/130823-01.html〉 (2019 年 9 月 28 日)
- 前田信一・市川太郎 (2013). 児童養護施設における「不適切な関わり」に関する再発防止策検討委員会実践報告 こども教育宝仙大学紀要, 4, 97-107.
- 毎日新聞 (2019). 葛飾の認可外保育施設 園児の顔などたたく 都が改善勧告 / 東京 毎日新聞 3 月 13 日地方版
- 佐藤緑平・近藤綾加 (2019). 認可保育所で体罰か 5 人の手足にあざ, 皮下出血も 下関市が調査 毎日新聞 最終更新 7 月 29 日 05 時 27 分
 〈<https://mainichi.jp/articles/20190728/k00/00m/040/170000c>〉 (2019 年 9 月 28 日)
- 蓬田正志 (2019). 園児虐待・体罰 13 件 「バカ」「ブタ」/ 正座させ/ 布団で全身巻き 当時の理事長口止め 福岡市が改善勧告 毎日新聞 2 月 16 日西部朝刊

1) 本論文は、第 2 著者による福岡教育大学教育学部初等教育教員養成課程 幼児教育選修における 2015 年度卒業論文で使用されたデータを元に、第 1 著者がデータを再分析、考察して作成された。

2) 本研究では、子どもに対する虐待、不適切な対応を総称してマルトリートメントと呼ぶ。厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課による「子ども虐待対応の手引き (平成 25 年 8 月 改正版)」によると、「諸外国では、『マルトリートメント』(不適切な養育) という概念が一般化している。諸外国における『マルトリートメント』とは、身体的・性的・心理的虐待及びネグレクトであり、日本の児童虐待に相当する。」とある。花田・永江・山崎・大石 (2007) は、マルトリートメントと虐待との相違は①マルトリートメントが虐待者を親や保護者に限定せず教師, 保育士, 年長の児童などを含むこと, そして②現在は子どもが深刻な状態でないとしても, 不適切と考えられる養育全般を含むことにあると考察している。本研究では虐待的な行為を広くとらえることを意図して, マルトリートメントの用語を採用することにした。

